

KOZMOS

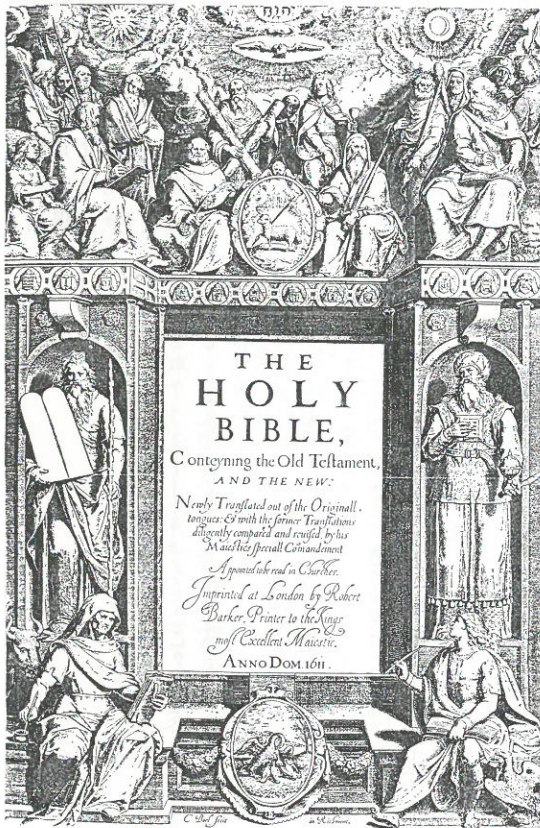


本学は1987年に100周年を迎えます

特集

コスモス No. 77 1987 春

図書館再発見



True testimonie.		S. John.	True freedom.
*Deut. 17. 7.	7	So when they continued of him him, hee lift up himselfe, and saide vnto them, * Hee that is without sinne among you, let him first cast a stone at her.	22 Then said the Iewes, wouldest thou kill himselfe: because he saith, whither I goe, ye cannot come.
	8	And againe, hee stouped downe, and wrote on the ground.	23 And hee said vnto them, Wee are from beneath, I am from above: Wee are of this world, I am not of this world.
*Chap. 4. 19. & 20. & 21.	9	And they which heard it, being convicted by their owne conscience, went out one by one, beginning at the eldest, euen vnto the last: and Iesus was left alone, and the woman standing in the midst.	24 I said therefore vnto you that ye shall die in your finnes. For if ye beleue not that I am hee, ye shall die in your finnes.
	10	When Iesus had lift up himselfe, and said none but the woman, hee said vnto her, woman, where are those thine adulterers: hath no man condemned thee?	25 Then said they vnto him, who art thou? And Iesus saith vnto them, Euen the same that I saide vnto you from the beginning.
*Chap. 5. 11.	11	Shee saide, So man, Lord. And Iesus saide vnto her, Neither doe I condemne thee: Goe, and sinne no more.	26 I haue many things to say, and to iudge of you: But hee that sent mee is true, and I speake to the world, those things which I haue heard of him.
	12	Then spake Iesus againe vnto them, saying, * I am the light of the world: he that followeth mee, shall not walke in darkness, but shall haue the light of life.	27 They understood not that hee spake to them of the Father.
*Deut. 17. 8. & 18. & 19.	13	The pharisees therefore said vnto him, Thou bearest record of thy selfe, thy record is not true.	28 Then saide Iesus vnto them, when ye haue life by the Sonne of man, then shall ye know that I am he, and that I doe nothing of my selfe: but as my Father hath taught mee, I speake these things.
	14	Iesus answered, and said vnto them, * Though I beare record of my selfe, yet my record is true: for I know whence I came, and whither I goe: but ye cannot tell whence I come, and whither I goe.	29 And he that sent mee, is with me: the Father hath not left mee alone: for I doe alwayes those things that please him.
*Deut. 17. 8. & 18. & 19.	15	Ye iudge after the flesh, I iudge no man.	30 As hee spake those wordes, many beleued on him.
	16	And yet if I iudge, my iudgement is true: for I am not alone, but I and the Father that sent me.	31 Then said Iesus to those Iewes which beleued on him, If ye continue in my word, then are ye my disciples indeed.
*Deut. 17. 8. & 18. & 19.	17	* Iesus also writen in your Law, that the testimonie of two men is true.	32 And ye shall know the Truth, and the Truth shall make you free.
	18	I am one that beare witness of my selfe, and the Father that sent mee, beareth witness of mee.	33 * They answered him, we be Abrahames seed, and were neuer in bondage to any man: how sayest thou, Wee shall be made free?
*Deut. 17. 8. & 18. & 19.	19	Then said they vnto him, where is thy Father? Iesus answered, We neither know him, nor my Father: if ye had knowne me, ye should haue knowne my Father also.	34 Iesus answered them, Verily, verily I say vnto you, * Whosoever committeth sinne, is the seruant of sinne.
	20	These wordes spake Iesus in the temple, as hee taught in the Temple: and no man layd hands on him, for his houre was not yet come.	35 And the seruant abideth not in the house for euer: but the Sonne abideth euer.
*Deut. 17. 8. & 18. & 19.	21	Then saide Iesus againe vnto them, I goe my way, and ye shall seeke me, a shall die in your finnes: whither I goe, ye cannot come.	36 If the Sonne therefore shall make you free, ye shall be free indeed.
			37 I know that ye are Abrahames seed, but ye seeke to kill mee, because my word hath no place in you.
			38 I speake that which I haue seene with my Father: and ye do that which ye haue seene with your father.
			39 They

欽定英訳聖書（1611年刊，複製）の標題紙と新約聖書ヨハネ福音書第8章32節

「而して真理は汝らに自由を得さすべし」

貴重書から

『東斎随筆』

——室町後期写延徳三年奥書本——

高城 功夫

『東斎随筆』は、一条兼良の編著作で二巻一冊、随筆とあるが説話集である。鎌倉時代成立の説話集を中心に、興味ある説話を先行作品から抄出した備忘書である。全体を十一類に分類して再構成したものである。原資料から直輸入した説話が多くあるが、折衷・簡略化した説話や和らげた表現内容としたもの、書き改めたものも見られる。成立は、応仁の乱(1467)による兼良の書庫桃花坊文庫の焼失以後、奈良疎開の時の『花鳥余情』(源氏物語の注釈書)の執筆(文明4年)と本書の関係から帰京した文明9(1477)年頃までと考えられている。諸本は、第一次本(説話数78、群書類従本など)、第二次本(説話数78・注釈5、内閣文庫蔵甲本・筑波大学蔵本など)、第三次本(説話数120・注釈9<筆者の算出>、東洋文庫蔵本・内閣文庫蔵乙本・宮内庁書陵部蔵本など)と三類に分類されている。十一類の部類分けは、上に、音楽・草木・鳥獣・人事・詩歌

・政道、下に、仏法・神道・礼儀・好色・興遊の順で配列されている。本書は従来低い評価が与えられ、博覧強記な兼良撰としては、小規模で平凡な説話集とされてきた。しかし、音楽類・草木類・鳥獣類といった分類の構成法に特色を見ることができるし、中世後期の乱世における文化や文学の意義、^{ひつそく}逼塞した公家の王朝憧憬に対する態度を探るとき、本書の価値も考慮されねばならない。また随筆という書名が、近世の考証随筆類において先蹤となったことなど、本書の果す役割も少なくないと思われる。

本学図書館蔵『東斎随筆』(K049.1:I K-2)は、室町後期写、上下合せの一冊本。縦25.3糎、横20.2糎で、包背装の綴じ方である。表紙は楮紙で茶地無模様(後補)、題簽は、左肩に「東斎随筆 全」とあるが本文と同筆(包背装は痛み易いので、江戸中期頃の補修の際、題簽のみ新表紙に貼付したもの)である。表紙右下に蔵書 或いは函架番号か、貼付紙の痕跡が認められる。帙入りで、帙題簽には「東斎随筆 延徳三年奥書」とあり、「東斎随筆 室町時代写延徳三年奥書本 一冊」と記した帯がある。本文料紙は楮紙で、墨付は45丁であるが、元来上下で、第1丁裏に上目録、26丁裏に下目録がある。内題は、各類ごとに「東斎随筆」とある。蔵書印は、第2丁表に「神原家図書記」の墨陽刻

此二冊後成恩寺神岡之所作自筆一本先年給
内准后民鎮防別下向之時被与之正本且各推見
聊令之間今書寫者也

延徳重光大則献仲呂上降

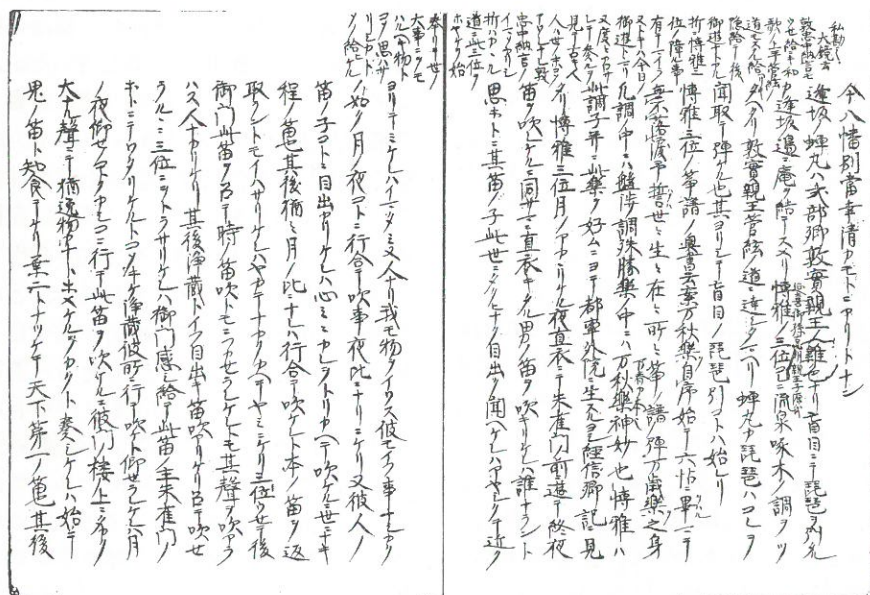
槐下 素門大座

人ニキリニ跪イヤトノ丹ニヨセ候トイワシケル
時ニ取テイミヤリケリカクイハレニ運奉セウレハ
ノサチ管絃ノ丹ニ素テ詩歌ノ歌セウシキリニ
素ト是也
十訓抄下奥書云波羅次郎九郎入道作
成退郎每比鞠ヲ好ミ其徳ヤ主ケン年ノ春鞠ノ
精熟ノ柳枝頭ニ見ケリミツラ結タシ小児年十二三計
ニイ青セノ唐装束ニイミミツラクシケニ有九何
事ノモ好トナラハ底ヲ極イヤウノミルニモ頭ハ許
ソセホシケシト懸タタシト有難サレハ學生ハ牛
毛ノ糸ヲ得テ藤角ノ如シトモ有又タ事ノ難ハ邪ス
ヨク事ノ難也トモ云リケニモト覚タタシ有ケリ
十訓抄下奥書云波羅次郎九郎入道作
長時時時ホ
居時時時ホ

と「東洋大学図書館蔵」の朱陽刻がある。本文は、片仮名交りで記され、一面12行書き、和歌は約二字下げ一行書き、朱引・朱点・朱丸印がある。裏表紙見返しに「大正五年一月廿日読了」の朱鉛筆の記入があり、奥書の年時等を考証した貼付紙がある。奥書(図版参照)は、45丁表末行より45丁裏にかけて、「十訓抄下奥書云六波羅次藤左衛門入道作云々^{長時時茂等奉公}居所東山麓書之見序／序云建長四年十月書之後深草院御宇也関岡屋称念院^{兼經兼平等也}／此一冊後成恩寺禪閣之所作自筆之本 先年給／内准后良鎮防州下向之時被与之正本 旦暮披見／聊余之間令書写者也／延徳重光大淵猷 仲呂上辭／槐下桑門大虚」とある。この奥書の「十訓抄下」、「序云」の2行分は、『十訓抄』宮内庁書陵部蔵片仮名本などの奥書と序を勘案したものと考えられている。次の「後成恩寺禪閣」は、兼良の号であり、「内准后良鎮」は、兼良の六男で曼殊院門跡竹内僧正良鎮であり、防州に延徳二年夏頃下向しているのので、この記載は信憑性が高い。「重光」は^{ちやうこう}辛歳の意、「大淵猷」は十二支の亥の異称、「中侶」は中呂のことで陰暦四月、延徳辛亥の年は延徳三(1491)年であり、その四月上旬を表す。「槐下桑門」は、前大臣で出家者を意味する。「大虚」は、三条西実隆の『実隆公記』(永正5年<1508>10月17日条)に「自内府東斎随筆^{龍翔院筆}被患之」と見える龍翔院、また『拾塵

和歌集』(大内政弘の家集)の跋文を認めた「槐下桑門」が該当し、転法輪三条藤原公敦と考えられている。従って大内氏に寄寓していた公敦に、良鎮は兼良自筆の『東斎随筆』を与え、公敦はこの正本を朝夕披見するのはぶしつけで失礼なことなので、手控えとして延徳三年四月に書写したということになる。本学蔵書本は、諸本分類上、第三次本に該当する。延徳三年光敦によって書写された祖本からあまり年代を降ることなく転写された本で、祖本をかなり忠実に転写した善本である。特に重要な点は、音楽類第六話の次に「私勘之大鏡云」の「博雅三位」に関する注が、東洋文庫本・書陵部本では六話の次に、内閣文庫乙本では七話の次に本文化されているのに対して、本学蔵書本では七話の頭注の形(図版参照)で記されている。「博雅三位」の話は、七・八・九話にあり、この注は本文と逆の評価をしているので後人による注と推測される。従ってこの注は、本来頭注の形であったものが本文化したのであって、頭注の姿が原形を伝えていると言える。

本学蔵書本は、第三次本延徳三年本系の祖本に近い時期の書写であり、東洋文庫蔵本(室町末期写・貴重書)より書写年代も古く、原形の姿を伝えている点、貴重な一本である。なお『能書事蹟』下に、真名本の存した記事があるが、現存は不明。翻刻は、第一次本が『群書類従』27・有朋堂文庫『宇治拾遺物語』付載、第三次本が『中世の文学』(三弥井書店)にある。(文学部助教授 たかぎ・いさお)



——『東斎随筆』音楽類第七話「博雅三位」の頭注——

特集 図書館再発見

真理がわれらを自由にする

小 倉 欣 一

第二次大戦末期 東洋大学図書館を米空軍の焼夷弾から守り、戦後は他大学に先駆けて 図書館学講座を開設し、社会学部教授として、司書の育成にあたられた和田吉人氏は、昨春定年で退職された。同氏の献身的な活動と独立不羈の精神は、知る人に大きな感銘を与えていたが、このたび関係諸氏の編集になる書物『和田吉人 図書館学・その理論と実践』（早川図書1986年）と『退任記念講演』（図書館学研究室 1986年）の刊行によって、その足跡が、新入生諸君をはじめ、未知の人々にも伝えられることになり、誠に喜ばしい。

「事件として報道されたことが、たまたま私の知っていることであった時に、それが、事実といかに異なっているかを知ることができる。その全貌が報道されていないため、その意味が全然反対に理解されるように書かれていることもある。これによって見れば、印刷物に書かれた膨大な情報は、意味が違っているのではないかと疑われる…。…図書館資料が虚構の上に築かれた文明の所産であるとすれば、これは大問題である。いずれにしてもこの資料群から真実を探りあててことは、大海中に一粒の砂を探すほど困難であると心得なければならぬ。」「オフィシャルの発言などというものも、或いは、オフィシャルな発表であるが故に信用しない方がよい。」体験に裏付けられた和田氏の意見は、私に標語「真理がわれらを自由にする」を想起させた。国会図書館中央ホールに刻まれ、図書館の理念を謳った有名な文句である。

標語の生みの親は、参議院図書館運営委員長として活躍した歴史家羽仁五郎氏であり、1948年国立国会図書館法の制定にあたって、従来の日本の政治が、真理に基づかず、虚偽に基づいており、軍部や行政官僚の一部が、国民の現実から遊離し、

総合的見地を欠いた調査によって国策を樹立し、全国民を誤り導いた事実には戦慄すべきものがあり、この標語を法案の前文に明記したと述べている。羽仁氏の後の説明では、元来は聖書の言葉であるが、ドイツ留学中フライブルク大学の建物に“WAHRHEIT WIRD MAN FREI MACHEN”とあるのを読み、感動したことに発するという（羽仁五郎『図書館の論理』日外アソシエーツ 1981年）。

私は、このドイツ文のMANの用法に疑問を抱き、標語採用の詳しい事情を知りたくなった。訪れた国会図書館では、稲村徹元主任司書が親切に沢山の資料を見せてくださった。そのお蔭で、標語をホールの壁に刻む際、ヨハネ福音書第8章32節のギリシア語原文“*ἡ ἀλήθεια ἐλευθεροῦσιν ὑμᾶς*”（「真理はなんじらに自由を得させるであろう」）の方も一緒に掲げることになり、両者の意味の食い違いが問題となったことがわかり、またフライブルク大学の最近の写真からは、原文に忠実なルター訳“DIE WAHRHEIT WIRD EUCH FREI MACHEN”の文句が読みとれた。私は、直ちに同大学図書館に、標語の揭示年代、解釈などにつき照会の手紙を書いたが、目下のところ、『ミケルアンジェロ』（岩波新書 1939年）、

『都市』（同1949年）でヨーロッパの自由都市を高く評価した羽仁氏は、恐らく法諺「都市の空気は自由にする」をヒントに、誤った記憶にもとづき、語呂の良い日本語の名文句を創出したのではないかと推測している。和田氏は、この標語と図書館のあり方について、時代の要求にともなう社会史的理解を示し、山下信庸氏は、著書『図書館の自由と中立性』（鹿島出版会 1983年）で、真理と自由の原義、相互の関係から標語の立入った分析を試みている。情報化時代にあって、「知る権利」と図書館の役割を考えると、この標語は、いまや新たな意味づけが必要なのではあるまいか。

（おぐら・きんいち 経済学部教授）

私にとっての図書館

張 品 鳳

塚 田 英 利

「日本語は難しい」、「講義の内容がよくわからない」などと言うような言葉は、日本にいるすべての留学生にとって、共通な言葉だと思います。なんとか講義の内容をもっと理解するために、色々な本を参考にするのが一番正解だと思います。と言う意味で、図書館は私にとって欠かすことのできない場所です。

図書館の本を参考にするとはいっても、必ずそのあと講義の内容が全部わかるとは限らないけれども、しかしなにもしないよりはましだと思います。と言うのは、図書館にある本はほとんどと言っても良い程日本語で書かれており、私のような留学生では、それをすべて理解するのはちょっと無理だと思います。英語の参考書は多少あるけれども、世界中で一番多く話されている中国語の参考書がほとんどないのが残念です。これからの国際化時代のためにもっと外国語の参考書を図書館に入れるべきだと思います。

しかし、それにもかかわらず、講義のあと図書館に行ってゆっくり新聞を読んだり、雑誌を目にしたり、たまに視聴覚室でのんびりテープを耳にしたりするのが私の日課です。でも、雑誌に関しても一つの疑問があります。大学の図書館だけでなく、日本全国のどんな図書館に行っても、英語の雑誌は全部西洋のを中心とする雑誌であり、アジアの国々の政治・経済・文化などを中心とする英語の雑誌が一冊も図書館に置いていないことに驚かされました。私は日本人の“脱アジア観”をしみじみ感じています。

一方、冬の寒さに暖房、夏の暑さにクーラーと言う図書館は私の日常生活に大きな役割を果たしています。つまり、いくつかのことを除けば、図書館は私にとって、最高の場所です。

法学部法律学科3年（中華民国台湾留学生

チヨウ・ヒンホウ）

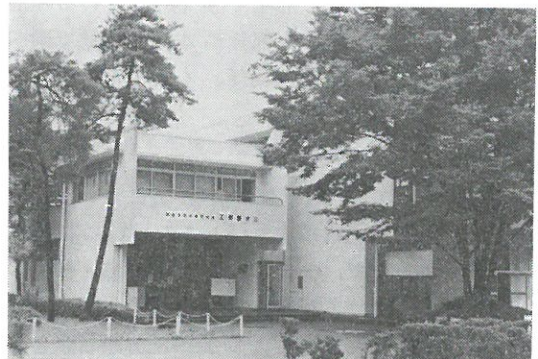
図書館というものを初めてみたのは小学校に入ったときだったでしょうか。当初の印象はむずかしい本がたくさん並んでいる部屋といったところで、利用していたのは専ら学級文庫のほうでした。

本は嫌いではなかったですし、特に大学に入ってからレポートを書く必要にせまられた事あって、学校の図書館はよく利用してきました。独特の分類法がくせもので目的の本を探すのに苦労しましたが、最近やっと慣れてきて迷わずにすむようになってきました。

こうなると読みたいと思う本がいろいろとみつけてきます。自分の専門分野でさえ未知の部分がたくさんあるのですから、その他の分野についてはなおさらです。きちんと分類整理された本のつまった背の高い書架の間にいると、まるで自分の知らない場所にいるような感じがしませんか。

私にとって図書館とは手軽にセンスオブワンダーをあげあわせてくれる不思議な箱といったところでしょうか。

(工学部機械工学科4年 つかだ・ひでとし)



瀟酒な佇まいの工学部分館

朝霞分館を利用して

大 腰 園 子

私が朝霞分館から受けた第一印象は、観葉植物があつて、新しくて明るいということでした。そして、朝霞分館は開架方式なので、本を書架から自由にとって閲覧することができます。

ところで、私は図書館学専攻なので、図書館学概論などの本の借出しや『現代の図書館』・『大学図書館研究』などの雑誌を閲覧して、朝霞分館を利用しました。朝霞分館に所蔵されていない本や雑誌が必要な時は、白山の図書館に問いあわせていただいたり、図書館の相互協力によって他の大学へ複写の依頼をすることができます。私は、『Outline of Cultural Materials』の目次を東北大学へ依頼したり、『プロメテウス』という雑誌の一部を文教大学へ依頼しました。

私の朝霞分館利用法は他にもたくさんあります。例えば、一般教養で教授が紹介してくださった本を閲覧します。『万葉集』を借出ししたり、『猿人日記』を空き時間に読んだりしました。そ

れから、レポートを書くために、題名しかわからなくなった本の書誌事項を『出版年鑑』で調べたり、『日本書誌の書誌』を使ってレファレンスの勉強をしたりしました。参考図書は、書誌や目録・索引誌・抄録誌・言語辞典・百科事典・専門事典・ハンドブック・便覧・要覧・図鑑・年鑑・統計書で、これらを利用して（あるいは利用せずに）朝霞分館で勉強することができます。

その他にも、新聞コーナーで新聞を読んだり、図書館学概論の昭和61年度の最終講義では、視聴覚室を利用したりしました。そして、司書の方達はとても親切で、珍問(?)にもいやがらず、レファレンス・サービス(参考業務)を行ってくださいます。このように、私は朝霞分館に大変お世話になっています。

図書館の業務機械化が進む中で、暖かい人間的なレファレンス・サービスもその重要性を増してくるでしょう。それを行いえるのが、朝霞分館ではないでしょうか。

(社会学部応用社会学科1年

おおごし・そのこ)

図書館に慣れ親しもう

★ 朝 霞 分 館 ★

“図書館は大学の顔”これは今年の大学案内にある名文句。早速、図書館に行ってみると、さすがが昨年4月にオープンしただけに新しく気持ちよい。図書館員にそのことを話すと、自慢はもっと他にあるという返事であった。その一つとして視聴覚室をあげられた。視聴覚室は、ビデオ・CDなどがすべて1人で操作できるシステムになっている。まるで自分の部屋で視聴しているみたい。また、図書資料の大部分が本屋の感覚で選べる開架方式もきわめて便利だ。もちろん目録も充実している。

★ 白 山 図 書 館 ★

玄関に入ってまず目録ケースが目についた。館内の案内板や説明板によれば、この目録には二種類あるとのこと。1つは、著者・書名・件名のいずれからも引ける辞書体目録と、2つめは、あらゆる知識を数字に置きかえて並べた分類目録というものだそう。その他にも雑誌については、先の

目録とは別に雑誌目録があつて、これら図書資料や雑誌の蔵書の多さに胸がワクワクしてしまう。

書庫に行ってみた。何かおかしい。白山図書館の蔵書は約49万冊(昭和62年2月現在)だというのに少なすぎる。あらためてカウンターの係員にたずねると、ここは開架書庫と言って直接図書を手にできる書庫で約3万冊を収蔵、したがって資料の多くは利用者が出入りできない閉架書庫にあるそうだ。ナルホド、それで目録があのよう完備しているわけだ。目録を引いてみると意外に簡単だし面白い。それに「利用のしおり」No.1からNo.7まで各種あるのも親切だ。図書館は使えば使う程、ヤッパリ、ワンダーランドだ。

★ 工 学 部 分 館 ★

入館すると、まず工学系の専門雑誌が所狭しと展示されているのに驚かされる。それらは最近の科学技術の進歩の様子を知らせてくれる。開架の書棚には基本的な学習書がぎっしりとつまっている。専門課程にすすめば、コンピュータを駆使して国内外の学術情報を得ることもできるという。足繁く図書館に通い、館員に顔を覚えてもらおう。

なるほど ザ・ハイテク (3)

インテリジェントビル について

永 峰 章

最近、インテリジェントビル (Intelligent Building) という言葉が、色々なところで見られるようになった。こうなったきっかけは、米国のビルディングシステムズ社 (United Technologies Building Systems Co.) が参加して1984年1月、コネチカット州ハートフォードに竣工したシティプレイスビル (City Place) を“インテリジェントビル”と称したことにある。

UTBS社が担当した工事は、空調・エレベータ・防災等の設備と電算機・通信設備で、情報・通信のサービスを行うことであった。

インテリジェントビルといったときの内容は、ビルの中にローカルエリアネットワーク (Local Area Network : LAN) を巡らし、電算機と接続する一方、2つの特徴をもつものである。

一つは、シェアドテナントサービス (Shared Tenant Service) というもので、ビルのテナントに行われるサービスである。

もう一つは、ビルディングオートメーション又は建築設備の統合化で、電算機・LANとつないで建築設備をコントロールすることによって、建物の安全性の向上と省エネルギーをねらったものである。

わが国では、種々のOAシステムを導入し、最新の建築設備を装備したビルがいくつか完成し、1985年頃よりそれらをインテリジェントビルと呼ぶようになってきている。国でも「インテリジェントビル研究委員会」を発足させ、設計・施工の基準・指針の策定、高度情報社会における建築物のあり方など広範囲の検討を行っている。

インテリジェントビルの定義は明確ではないが概ね次のようなイメージと言える。(参：図-1)

- 1 高度情報通信サービスを廉価で受けることができる。

- 2 最新鋭のビル管理システムによって快適な設備環境とビル全体の総合的安全が保証されている。
- 3 快適に執務できるプランのオフィスが供給される。

このようなオフィスビルに見られる変革は、他の建築物 (住宅・病院・ホテル等) へ波及し、今までとは異った発想の中に、次々に具体化されてくるものと考えられる。

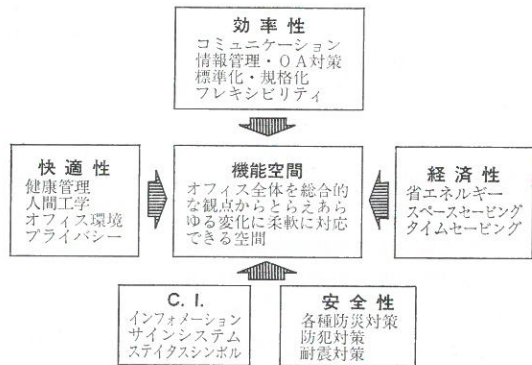


図-1 インテリジェントビルのイメージ 注 文献1)

～ 文 献 ガ イ ド ～

- 1) インテリジェントビルの計画 安富重文著 鹿島出版会編 P24
- 2) インテリジェントビル (昭61年) 対馬義幸編著 日本経済新聞社
- 3) インテリジェントビルの計画 近代建築 1987-1
- 4) インテリジェントビル 空気調和・衛生工学会誌 1986-11
- 5) インテリジェントビルの建築・設備計画 建築と社会 1986-4
- 6) インテリジェントビルの方向を探る 建築雑誌 (昭和60-9)
- 7) 人間工学を配慮したOAオフィス 杉山 孝・大田 寿則 建築設備士
- 8) OA化オフィス設計実務便覧 (昭60年) 堀・山代・野田 フジ・テクノシステム
- 9) OA機器のある室の照明設計 高橋貞雄・袴田薫生 照明学会誌 (昭59-3)
- 10) CIE : Vision and Visual Display Unit Work Station, CIE Publication No.60 (1984)

(工学部講師 ながみね・あきら)

哲学館出身者著作文内(その1)

前号(No.76)の特集は、哲学館(本学の前身)講師陣の著作ガイドでした。これら優れた講師陣の指導によって、哲学館が幾多の俊英を輩出したことは、すでに周知のとおりです。そこで、今回は、その俊英たちの著作(本館所蔵)にスポットをあててみました。なお、表題に「その1」とつけたのは、紙面の都合上掲載できなかった人物および著作等について、今後も随時収録したいと意図しているからです。

凡 例

1. 出身者の配列は五十音順とした。
2. 人物ごとに氏名、卒業年次・称号、生没年、専門分野・職分、著作の順に示した。
3. 号、通称等を氏名の後に付した。
4. 書名の後に出版社、出版年、請求記号を()で記した。

安藤正純 明治36得業・大正7講師号(明治28哲学) 明治9—昭和30 政治家。安藤正純遺稿(安藤正純先生遺徳顕彰会, 昭和32, 310.4:AM)

石川三四郎 明治34得業 明治9—昭和31 アナーキスト。哲人カアペンター(東雲堂, 明治45, 931.5:CE) 古事記神話の新研究改定増補版(白揚社, 大正13, 210.3:IS) 東洋古代文化史談(不盡書院, 昭和14, 220.3:IS) 東洋文化史百講(育生社, 昭和14, 220:IS—2) 近世東洋文化史(大雅堂, 昭和23, 220.5:IS) エリゼ・ルクリュ思想と生涯(国民科学社, 昭和24, 450.2:RJ) 歴史哲学序論(弘文社, 昭和24) 消費組合之話:明治社会主義資料叢書4巻(新泉社, 昭和47, 363.08:M:1—4) 石川三四郎著作集(青土社, 昭和52—54, 363.021:IS—2) 浪:日本人の自伝第10巻(平凡社, 昭和55—57) [訳書] エリゼ・ルクリュ:世界文化地史大系(有光社, 昭和18, 290.8:RJ)

加藤精神 明治24・大正7講師号 明治5—昭和31 真言宗僧侶・同宗豊山派管長・仏教学者。弘法大師伝の新研究(東京, 昭和11, 188.52:KS) 般若理趣経研精録(秋溪文庫, 昭和13, 183.7:KS) 観音経講話(有光社, 昭和16, 183.3:KS—2) 三経指帰(岩波書店, 昭和23, 188.51:K) 加藤精神著作集(世界聖典刊行協会, 昭和53, 188.5

:KS—4)

河口定治郎(慧海) 大正7講師号(明治24) 慶応2—昭和20 学僧・探検家。西藏旅行記(博文館, 明治37, 292.29:KE:3) 印度密経時代区劃の研究(高野町密経研究会, 大正8, 180.225:KE:2) 仏教和讃(仏教宣揚会, 大正10, 186.5:KE) 西藏伝印度仏教歴史(貝葉書院, 大正11, 180.225:KE) 在家仏教(世界文庫刊行会, 大正15, 180:KE) 平易に説いた釈迦一代記(金の星社, 昭和5) ヒマーラヤ山の光(日本蔵梵学会, 昭和6, 129.74:KE) 正真仏教(古今書院, 昭和11, 180.1:KE) 西藏旅行記(山喜房仏書林, 昭和16, 292.29:KE) 第二回チベット旅行記(河口慧海の会, 昭和41, 292.29:KE:2) チベット旅行記:西域探検紀行全集(白水社, 昭和41, 292.28:S) チベット旅行記(白水社, 昭和53, 292.29:KE:6) Three years in Tibet(R. P. Bhandar, 1979, 292.29:KE:7) [訳書] 蔵文和訳大日経(飯能西藏教典出版所, 昭和9, 183.7:D) 西藏大蔵経甘珠目録(東洋大学図書館, 昭和58, 183:KE—2)

喜谷良哉(六花) 大正8得業 明治10—昭和43 俳人。梅林句屑:現代俳句集成第5巻(河出書房新社, 昭和57, 911.36:G—3:1—5)

高島米峰 明治29教育 明治8—昭和24 著述家・仏教運動家。一休和尚伝:教界達人叢書4(文明堂, 明治37, 180.28:K) 広長舌(丙午出版社, 明治45, 184:TB:5) 金堂仏像等目録(丙午出版社, 大正6, 188.24:TB) 熱罵冷評(丙午出版社, 大正6, 184:TB) 仏心鬼語(丙午出版社, 大正8, 180.4:TB) 四十二章経講話(丙午出版社, 大正8, 183.6:TB) 遺教経講話(丙午出版社, 大正10, 183.1:TB) 現代世相批判癡乃虫(丙午出版社, 大正10, 184:TB:6) 仏教界の諸問題(自筆草稿, 大正11, 180.4:TB:2) 人生小観(丙午出版社, 大正15, 184:TB) 本願寺物語(実業之日本社, 昭和6, 188.75:TB) 権兵衛と鳥(高山書院, 昭和15, 184:TB:3) 一休和尚伝(明治書院, 昭和17, 188.84:TB:1) 聖徳太子(潮文閣, 昭和17, 210.33:S:3) 処世と青年(潮文閣, 昭和19, 184:TB:2) 聖徳太子正伝(明治書院, 昭和23, 210.33:S:4) [共著] 般若心経講話(丙午出版社, 昭和7, 183.2:TB) [翻刻] 梵文聖婆伽梵歌(明治書院, 昭和14, 129:B:7)

TOYO UNIVERSITY LIBRARY INFORMATION BULLETIN *KOSMOS*

1987 春(No.77) 1987年3月20日発行 編集:コスモス編集委員会 発行人:剣持通夫 発行所:東洋大学附属図書館 〒112 東京都文京区白山5丁目28番20号 Tel. 03 (945) 7314 ©東洋大学附属図書館 1987